
愛を隠して

swan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を隠して

【Nコード】

N1260R

【作者名】

Swan

【あらすじ】

十八歳の誕生日、令嬢、藤ふじ 絵美子えみこはずる賢い悪魔になって父の友人で町医者である浅倉あさくら 正ただしを訪ね、誘惑した。
「いつも女性としていることを、私ともしてほしいの」

？

1

その人は最初、冗談だね　　…そう言って、その魅力的な瞳で訴えかけた。

嘘だと言ってほしい　　。

彼の無言の問いかけが、そう語りかけていた。しかし、私が変わらぬ同じ言葉を繰り返すと、彼は恐ろしい生き物を見るかのような目でこちらを見た。…私は彼が、飲みかけのコーヒーカップを落としてしまわないか心配だった。

「…きみは…何を言っているのか…、…解っているのか…。」

自分より倍も大人な男性がまるで怯えているのを見て楽しむ趣味はない。ただ私は　　…。

「何を怖がるの？いつも女性としていることを、私としても　　そうお願いしただけよ。」

私は素知らぬ顔で気まぐれに背を向け、水槽の中で泳ぐ、彼の大事にしている小さな赤い魚を眺める振りをした。少なくとも彼にそう見える必要がある。簡単に考えてほしかった。この誘惑を、それほど重いモノとして捉えてほしくはなかった。

「…からかうのは止しなさい。今日はきみの18歳の誕生日だよ。何でも欲しいものを言ってくれて構わない…、…確かに僕は言ったがね…。」

「だから。“あなたを”と」

ただ、私は欲しかった。父の友人として紹介された日から、ずっとこの男性だけが…。

“大人の女”という虚像を着込んで、こんな挑戦でもしなければ

女として見て貰えないほどに私は子供だったから。問題なのはこの幼稚な誘惑にも彼がのっけてくれるのか、どうか……。

私は秘かに大きく空気を吸い込んで、準備したいくつかの台詞の中から一つの文章を話した。

「女学校のお友達はね？みんなボーイフレンドがいるのよ。一人だけ経験がないなんて嫌じゃない。だから、ね？」

絵美子は艶を含ませた声音で言い終えると、チラリ……、と相手を伺って……ほっとした。吐き出す息が震えていた。

彼が私の奇行とも思える行動にまいつているであろうことは見て取れる。彼の青くなつた顔、珍事でも見るかのような視線が、この挑戦への成功を告げている。ここへ来る決意をしてから何度も練習した声音と仕草であつたから。

「…そんなことを頼むために、わざわざきみはやって来たのかい。

…いいか、それは恥ずかしいことではないよ。今時の娘こらがどうでも比べるものでもない」

「一度でいいのよ。その後までしつこく付きまತ್ತたりしないわ。

若い女の子とシテみたいって…考えるでしょう？」

「…きみは友人の大事な一人娘。手出しするほど僕は落ちぶれてないつもりだよ。…さあ、この話はおしまいだよ」

ズクン ……胸の奥が悲鳴をあげて痛み出す。

彼はアンティーク風のワインレッドのソファから腰をあげ、私は彼の後ろ姿を視界の端に捕らえていた。彼はそれきり飲む気のなくなつた、まだ一口しか手のつけていないコーヒ―を不用にシンクへと流し込んだ。

絵美子は下唇を噛んだ。

どうしたら…どうしたら彼は私の望みを叶えてくれるの。

焦っていた。挑発をしておきながら、彼の感情の変化に気付けないほど。

「男と女が何をするかなんて、私だって知識はあるのよ。まだ知らないだけ。あなたが聞いてくれないなら街へ行って他の人に声をか

けるわ。お友達の彼に違う誰かを紹介してもらってもいいんだもの」
シンクに爪先を向けたままの彼を横切り、前方にある出口を求めた寸前 …… 絵美子は初めて、彼の穏やかな眼差しが、怒りにも染まり得るのだということを思い知った。

「 …… きみは、恐ろしい女だね」

絵美子はゴクリ …… と唾液を呑み込んだ。カラカラに渴いた喉を潤したかったのに、すぐ後方に聞こえる這うような低音に体の機能は全くの無意味だった。

まずい …… とても …… まずいことをしたのかもしれない …… 。

ほんの一瞬だ。扉に指をかけた瞬間にはもう、力強い掌が扉を押さえ付け、開閉を遮断してしまった …… 。

そして今 …… 、ワンピース越しに背中を掠める彼の着古す白いシャツに私は …… 衣類の触れ合いにさえ私は打ち震え、のぼせ上がっている …… 。

止まった呼吸を気付かれぬようにと慎重に吐き出した途端、彼が短い笑い声をもらった。私の高揚感は一瞬にして寒空の下に放り出された。シヨックからそれまでの仮面の女は一気に縮み上がり …… 、暫く後である結論に辿り着いた。

見据える後ろ姿から、彼は私のあら捜しを始めたのかもしれない …… 、と。ワンピースのシワを見つけ、綺麗にしたつもり髪の毛の寝癖を見つけたのかもしれない。それとも …… 裾から覗く不健康な蒼白い素肌では気落ちしたのかもしれないかった。

ああ …… ！もしかすると、とうとう彼は自分の魅力に魅いられる小娘の想いに気が付いて嘲笑ったのだろうか …… ！

そんな絵美子を我に返らせたのは、いつもの穏やかな音を紡ぎだす唇が、しかしこの時は温もりの感じられない冷ややかで静かな声を発し始めた時だった。

「 …… 長年の友情を失う覚悟をしなければならぬね」

その静か過ぎる声が、絵美子を底果てぬ悲しみへと陥れる。

「 …… 四十の男に十八の少女を抱けというなら経験もさせよう。きみ

の口がつまらん考えを喋らずに済むなら」

「っ、……あ……」

彼が、ほんの数センチだった隙間を、異質な身体でジワリと押し詰めると、絵美子はやっと自分がどんな馬鹿な間違いを犯したのかが気が付いた。きっと今更許されないだろうことも。

「だが、それだけだ」

「……………」

彼の言葉を理解出来ぬまま、密着した身体に、捉えられた。

2

ずっと好きだった。13歳の春、父が古い友人だと言って彼を家に招待した日から。

彼はまさに春そのものだ。笑うと細くなる眼鏡の奥の優しい目元、低く穏やかな声が紡ぐ、少し年配な言葉遣い……。刻まれたシワも、私には歳上男性特有のセクシーな魅力に見えた。彼の、洗練された落ち着いたあらゆる魅力に私が跪くのに時間は要らなかった。父には感じ得ない感動を、真新しい感情を、私は生まれて初めてこの男性に感じていたのだから。

決して近づけないと知りながら、早く大人になりたいと願った。クリスマスにはもちろん、願いが叶うのなら毎日のお祈りも欠かさない。

ある時には、彼が誰か知らない女性と並んで歩く姿を見かければ、その女性に不運が降りかかればいい、と思った。そんなに大それたことでなくていい。彼の前で不恰好に転ぶなり、ヒールが折れるなり……。しかし、その後で愚かな自分に落ち込んで、願いを打ち消

した。だってそれは幸運だ。彼は転んだ女性を支えるだろうし、ヒールの折れた彼女を放つたりはしない。

…私に出来たのはせいぜい、せめて彼女が彼の好みでないのを熱心に祈ることだけだった。

絵美子は、固く、冷たい扉に押し当てられ、羞恥心に耐えていた。膝が震え崩れ落ちると、すかさず後ろから逞しい片腕が巻きつき、降参を許さなかった。顔が見たいと振り向けば、“僕はこちらからが好きなんだ”　そう言われて拒まれる。

「っ…うあっ……」
容赦のない力で肌を触れられようと、それに抵抗しようとする反抗を、どんなに乱暴に押さえ付けられようと、これは彼がしてくれること。私が望んだことだと…。

「っっ………!?」
だが、その瞬間、絵美子は自分を抱き込んでいる男の行動を疑った。太股を撫でた掌が、ギ…ッ、と爪を立てた後、その張本人が悪びれもなく口を開くのだった。

「…ああ。少々痛かったかい？」

「っ…や、めて……い、たい、のっ……」

「気に入らなかつたかい？…僕はサディスティックな質でね。いつもしていることを実践してるんだが」

彼へと投げつけた言葉の矢が、彼の大人の余裕をたくわえて、幼い心に突き刺さる。どんなにぞんざいに扱われようと、これは私が望んだことだった。悲しいのは、私に触れても彼は熱くならないだろうこと……。

「…さあ……」

そして、その時、絵美子は目を見開き凍りついた。振り向く許しを貰えたのだと思った。だが、指を掴まれ誘導されるのが何処かを悟ると、光は消え失せた。

「っ…やっ……」

…ドクン　…ドクン　…。

絵美子の驚愕した視点は、男の指が絡まる、”そこ”に触れた自分の手に注がれた。恐れ、動かない少女に、ただただ静かな声音が降り落ちた。

「いつもの女性は口の中でさえ逝かせてくれる」

「っ……!!……っ……」

初めて、男性の欲望と恐ろしさを感じ取った絵美子は、おののき、そして傷付いた。

「きみは言ったね。“いつもしていることを、私とも……”。

さあ、しておくれ……」

だが、それ以上に心に沸き起こる感情は素直な喜び。“悲しい”と定めたはずの彼の冷静は、間違いだっただのだ。

彼も…私に動揺してくれているの………?

けれど、未知の経験には恐れが付きまとい、お願いからの行為には空虚感が生まれる。

彼のゴツゴツした大きな手が唇を開かせようと指をかけると、涙を塞ぎ止めるのにはここが限界だった。

「…おねがい……もう、やめて………」

だって、愛がない。どこにも見当たらない。冷たい瞳にも、声にも、言葉にも、指先にだって。

「…もう……いいの……よして………」

誰かと比べられるのも、同じように抱かれるのも……。だけど愛してほしいだなんて言えるはずない……。

彼から顔を反らし、溢れ出る涙を両手の甲で覆った。…塞がる視界の向こうから溜め息が聞こえてきた時、たった今されたどんな行為よりも、私は恐ろしかった。彼の纏う静かな落胆が。

「……もう帰りなさい。家まで送ろう」

たった今まで存在した男性が嘘のように、彼は子供の遊びに付き合っただけのように微笑むのだった。

「……もう少し自分を大切にしないさい。経験なら、いつか心から愛する人と学べばいい」

絵美子は茫然と思った。

私は……もう二度と訪れない夢の国への切符を逃してしまったの
かもしれない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1260r/>

愛を隠して

2011年3月2日20時10分発行